

テーマ活動づくりの方法論を求めて(その2)

福田三津夫

(白梅学園大学, 演劇教育)

論文の概要

ラボ・パーティのテーマ活動は地域における優れた演劇教育の典型であり、「限界芸術」(鶴見俊輔)の一つであるという視点に立って、生き生きとしたテーマ活動を展開している前田祥子チューターのインタビューからその方法論を探ってみた。番外編として中国支部オンライン研修「テーマ活動について語り合おう」について報告する。

キーワード

テーマ活動づくりの方法, 地域演劇教育, ことばと心の受け渡し, からだの語り, 等身大の表現

「テーマ活動づくりの方法論を求めて」のチューター・インタビューは佐藤公子さん, 渡辺忍さんに続いて今回は3回目になる。久しぶりのインタビューということであらためてその目的を確認しておきたい。

その前に, そもそも私はテーマ活動について次のように考えている。

- ・テーマ活動づくりの方法論を持たないと, 生き生きとしたテーマ活動は展開できない。
- ・その方法論は画一的である必要はまったくない。おおよその到達目標を確認して, その迫り方や方法はチューターに委ねるのがラボには相応しい。例えば, 山頂は目指すが, 登山ルートは異なってもいい, ということである。

では, なぜチューター・インタビューを重視するのか。

私の師匠であり, ラボにも関係の深い元小学校教師で教育運動家だった村田栄一さんは, 常々, 教師は「考える現場人」であれと語っていた。もちろん教育学者から学ぶことも多いが, 最終的には教師自身が教育現場の当事者として教育理論と実践を深めるべきであるという考えである。ここでの教師をチューターと読み替えても異論はないのではないだろうか。まさに現場人としてのチューターから学ぶ, その手立てがインタビューということになる。

今回のインタビューはコロナ禍のため初めて対面ではなくリモートであった。

さて, 今回ご登場いただくのは神奈川支部所属の前田祥子チューターである。パーティは 1994 年6月開設, チューター歴 27 年のベテランの領域に入るが, 今まさに脂がのりきった方という印象である。

そもそも前田チューターを推薦いただいたのはラボ教育センター本部の木原竜平さんである。その推薦理由を次のようにメールで知らせてくださった。

「前田チューターより, 中高大生の『ハメルンの笛ふき』の発表の動画を送っていただき, 子どもたちの聞きこみのすばらしさ, セリフや語りの力強さ, 表現から伝わるものがある, と木原が思い, 福田先生に『テーマ活動づくり』の論文の候補に良いと思い, 推薦した次第です」

私も早速動画を拝見し, インタビューが実現したらテーマ活動づくりのヒントが発掘できそうだったのである。

今回私の研究を強力にサポートしていただいているラボ教育センター本部の渡邊浩之さんは前田パーティの『ハメルンの笛ふき』を見て次のような貴重な感想を述べられ、インタビューへの呼び水になったことは間違いない。

「英語-日本語の語りがしっかりとしている、それぞれ聞きやすい、リズムに乗っているのでライブラリーをよく聞いていると思いました。表現は語りに合わせて一つひとついねいに考えているのではないかと思います。

語りが説明している間の表現をどのように考えていったのかを聞いてみたいと思った。登場人物と周りの表現をしている人たちとのシンクロする度合いが映像ではわかりにくかったので、そのあたりでくふうしたところはどういうところか、雰囲気を出す表現をしていたのか、登場人物の心情を表現するために考えたこと、どういうことがやりたかったのかを聞きたいと思いました。」

●テューターへの道, その原体験

前田テューターがテューターになるきっかけはなんだったのだろう。

前田:ラボのOGではないが、以前からラボのことは知っていた。テューターになる前にラボ国際交流プログラムに2度参加できた関係で、ラボで育っている高大生を見ていたので、子どもが生まれるなら絵本とラボで子育てがしたいと思っていた。近くにラボがなくて、アシスタントの経験があったので、わが子のためにラボ・テューターになった。

前田テューターの来歴の中で興味深いのは、一度だけではあるが演劇との強烈な出会いがあったことだった。まさに元高校定時制教師で劇作家の菅龍一さんが「創造的な劇づくりは原体験になり得る」と書かれことを実証してくれている。

前田:中学校での演劇体験が強烈に印象に残っている。中2の秋、学園祭で劇をすることになり即席の選抜メンバーだったが、2か月ほど『夕鶴』のつうの役を演じた。木下順二の台本のせりふのままの独白を覚えるのが大変で、一生懸命演じたという記憶しかない。学校の中ではセンセーショナルなできごとだったようだ。

あとにもさきにも演劇はそれだけだったが私には大きな体験で、おかげで小さな自信と自己肯定感があとに残った。石橋をたたくタイプだが、何事にも挑戦するようになった。今にして思えば、人生のターニングポイントだったと思う。ラボの子どもたちにそういう体験のチャンスを与えてあげたいと思っている。

●テーマ活動の発表会, ラボっ子の人数など

前田パーティのテーマ活動発表会は年に2回、4月に地区発表、パーティ全員で取り組む。11月は年代別で幼児から小1、小学生、中高大生の年代別に発表している。

『ハメルンの笛ふき』の動画に「トビウオ発表会」と銘打ってあったが、「パーティの愛称としてトビウオを使っている。パーティだよりのタイトルも。トビウオは大海の魚なのに、天空を飛ぶのがすごい。自分の枠組みを大きく超えて飛び出してほしいという願いを込めている」という。

ラボっ子の人数は『ハメルンの笛ふき』を演じた中高大生が20人くらい、受験による休会があるので、中3、高3は出ていない。小学生以下は20名くらい。

■前田チューターの「私のテーマ活動づくり十か条」

インタビューを快諾いただきしばらくして、前田チューターからメールが届いて驚愕させられた。「私のテーマ活動づくり十か条」が克明に綴られていたからだ。

私がかつて書いた「私の劇づくり十か条―遊べる脚本で、子ども自身の壁を破る」(拙著『いちねんせいードラマの教室』所収、晩成書房)をどこかで読まれて、それと対比する形で「私のテーマ活動づくり十か条」を書かれていたのだ。

私のインタビューの内容が動画と「私のテーマ活動づくり十か条」の検討ということに明確に絞られた。したがって、これからの記述がインタビューと「私のテーマ活動づくり十か条」で重層的になっていけるのは幸いだ。

ちなみに「私の劇づくり十か条」(福田三津夫)は次の通りで、それぞれ数行の説明(省略)がついている。

- 【第1条】子どもたちが遊べる脚本を選ぶ
- 【第2条】役はオーディションで決める
- 【第3条】状況設定をしっかり確認する
- 【第4条】役について詳しく説明させる
- 【第5条】劇の構造・テーマを理解する
- 【第6条】言葉を届ける対象を明確にする
- 【第7条】言動にきちんと反応する
- 【第8条】自分の壁を破る
- 【第9条】衣装・音効・照明もアピール
- 【第10条】教師の表現力を鍛える

●テーマ活動におけるテーマ決め

例年とは異なるコロナ禍の中でも4月頃から取り組みたいおはなしの希望を聞き、すでにテーマ決めがスタートしている。

私はパーティの話し合いは大学生が中心的にリードするのか、それともチューターなのかとても興味があった。それは学校教育では同年齢の活動が多いが、ラボ・パーティでは異年齢集団の特質を生かしているんだろうなという想像がつくからだ。それに対しては、「テーマ活動の取り組みごとにリーダーを決めていて、今回は『ハメルンの笛ふき』ならと名乗りを上げた高大生1名ずつ。2人を中心にチューターと相談しながら進めた。ただし、活動のMCは他の高大生も加わり、毎週交代した」というお答えがあった。

前田:7月には集合して活動できたので、4つの候補を実際に動いてみながら絞り込んでいって『ハメルンの笛ふき』になった。9月に本格的にスタートするとき、もう一度聴き直し、あまりにもすばらしい物語と語りで、チューターとしておじけづいてしまった。語りに力がないとテーマ活動にならないが、全員が一人のデコボコもなく物語を語り切れるだろうか、と心配して、「変更するなら今だよ」と言った。子どもたちはびっくりして急遽集まり再検討。結論は、絶対これをやりたいということに。経過としては、もとはと言えば今回は事情があって、チューターが提案した中から決めたが、もはや子どもが強くやりたいと思うお話になっていた。

テーマ決めの段階でさまざまなドラマが垣間見える。

しかし、そもそもどのくらいの期間でテーマ活動はできあがるのだろうか。前田パーティではテーマ決めに1か月前後かかり、その後上演までには通常3か月の期間を目安にしているという。

役決めにも、あるドラマが待っていた。

●テーマ活動，役決めの実際

前田：肝心の市長と笛ふきの希望が出ませんでした。ロールプレイの段階ではもちろん何の問題もなくいろいろな子たちがやっていたのですが、いざとなると沈黙の中どうにもならなくて、私が「大学4年の二人はどうなの？これが最後の発表会だよ」と口火を切ると、続いて賛成する声上がり、活動終了後に本人たちと話し合いました。「それが良いのはわかってはいるし、やりたくないわけでもない。でも、逃げのびたネズミがやりたかった」と二人とも言いました。主役級であるか否かより、役の魅力が優先するのはラボっ子特有かもしれません。私のパーティではよくあることです。このやりとりの後で、結局、「やります！」と言い、二人でどちらがどちらをやるのか決めていました。

主にせりふのある役は笛吹き、市長、逃げのびたねずみ、足の悪い少年の4つしかない。一番人気がねずみだったのは、独白がドラマティックで、語ってみたいという思いが強かったようだ。



市長：「てんのガウンに未練はないし」

●ライブラリー，その国の歴史・文化などへの接近

繰り返すが、「私の劇づくり十か条」の3～5条は次のようになっている

【第3条】状況設定をしっかりと確認する

【第4条】役について詳しく説明させる

【第5条】劇の構造・テーマを理解する

例えば、私が国語で物語文を教える時には、まず文章の構造を押さえることから読み取りを開始することになっている。前話・展開部・後話を確定し、前話については時代・場所人物・事件を、展開部・後話につ

いては人物の気持ち・文学作品としての表現・事件の発展を読み取っていくことになる。脚本も文学なので同様の読みをする必要があると思っている。そのことを簡潔に書いたのが第3～5条ということになる。

テーマ活動の場合はそもそも優れたラボ・ライブラリーがあるので「聴き込む」活動が有効とされる取り組み方に違いは当然あるし、しかしながら共通点もありそうだ。例えばライブラリーの背景へのアプローチとして前田テューターは次のように語る。

前田:テーマ活動をするときに、物語の背景を理解していないと取り違えてしまうこともある。『ハメルンの笛ふき』では、どんな時代でハメルンの町はどういう町か、自分たちが疑問に思うところを調べてくる。わからなくなったときにまたそれぞれ持ち寄ってくる。

実際の動きの表現をするとき、イメージがないと動けないので、共通のイメージを探るため調べることもある。当時のドイツやハメルンの町のことなど、調べてきてみんなで共有してくれた。

日本語も現代口語ではないので、わからないこと、わからない言葉に引っかかって調べることもあった。

お話をうかがいながら、私がハメルンの笛ふき男の資料館のことを思い出していた。世界中から『ハメルンの笛ふき』の絵本や中世ドイツ当時の服、家財道具などが所狭しと並べてあった。子どもたちが連れ去られたのは興味深い史実だがその当時の様々な資料が保管されていた。こうした体験を通して『ハメルンの笛ふき』を実感できるような気がしてる。

●テーマ活動とからだの語り

ラボのテーマ活動で独特なのが、登場人物以外の子たちの表現である。山や川などの自然、戸や玄関などの建物など劇でいう背景になったり、登場人物の感情の揺れ動き表現しているパーティもあった。ナレーションなどのことばの語りに対してこれらの集団的身体表現をからだの語りと名付けたことがある。

からだの表現についてどう考え、実践しているのだろう。

前田:いわゆる身体表現、子どもはそれが楽しくてテーマ活動をしている。ライブラリーで完成された音声はあるが、身体表現はゼロから作るのがおもしろい。聞いたイメージで動くことがおもしろい。解釈としてどうとらえるかが重要でナレーションで語っているものをそのままやるのであればいけない。やっているうちに表現はどんどん変わっていく。そのうち、これをやる必要あるかな、などとやりとりが起こる。『ハメルンの笛ふき』はことばが大事と思っている。語りの邪魔になるようなことはしたくないと思っていた。

身体表現は CD を聴きながら申し合わせしないで最初から動き始める。こう動きたいと思ったら、声をかけあって一緒に動いたりする。動いていくうちに、あの動きおもしろいね、などと言い合ってたんだんとまとまっていく。



「ウェーゼル川の岸まで来ると」

なるほど、『ハメルンの笛ふき』では全員が出ずっぱりということではない、いわゆるハケタ子どもたちも多く、新鮮な印象を受けた。集団で動く快感に酔ってしまうこともある。群読はみんなで声を合わせると心地よくて、そちらばかりに走ってしまうこともありがちだ。からだの語りも似たようなことがありそうだ。

●英語・日本語の表現，ラボメソッドを活かす

テーマ活動の表現に関する研究課題は、前述したからだの語りと英語・日本語の表現であると思う。実践交流を望みたいところだ。

英語・日本語のテーマ活動を鑑賞し続けて気づいたのは、英語だけよりも心落ち着いて見られることだ。どんなにクリアに英語を発音されても届いてこないことがあり、置いて行かれるという感覚が生じる。英語・日本語を経過する中でゆったりと物語を味わうことができる。そうした利点はあるが、唯、演じる側の工夫は必要だ。



“Rats!”

前田:二つのアクションをすることはしない。タイミングを合わせるときは、どちらにするかを相談している。「Rats! ねずみだ!」はみんなで言おうと、英語で合わせることにした。英語・日本語の二言語なので表現に膨らみを持たせることができるのではと思う。英日でワンセットというように子どもは受け止めていると思う。動きのタイミングやきっかけはその場その場で決めている。

●動画それぞれの表現,「ことばと心の受け渡し」ということ

いよいよ動画を見た感想を語り合う。

福田:登場した笛吹きは最初ほとんど直立不動でじっとしていたが、あの場面はどういう設定だったのか、動きが難しいですね。

前田:何をしようとするのではなく、緊迫感を保てるのがテーマだった。ストップモーションということもあった。

福田:最初、笛吹きと市長が会話するときに、声が届いていないように思ったが、最後の方のやりとりはずいぶん変わった。自分の思いを届けようという気持ちが出てきたのはなぜでしょう。

前田:1対1で対峙するシーンが二か所あるので、差をつけようと話し合った。最後は気持ちがストレートに出ていくところとして考えたが、市長が「笛ふきが本気でにくらたく思えてきた」というのに、どこかやりにくそうだった。発表の2,3日前に「やりにくいんでしょ?」と水を向けて、「動き回ったっていいし、思い切り気持ちをぶつけたらいいのでは」と話した。市長は、「それやりたい! そうしたい!」と言った。

全編語りのライブラリーともいえる『ハメルンの笛ふき』の中で語りが一番躍動していたと思ったのは、生き残ったねずみ。役としての語りが実に個性的で表現豊かだった。

前田:たくさんの候補者がいるなかで、決まった子。初めは静かにもっと穏やかな口調で話していたのだが、ある大学生が、「他は人間の世界だけど、この場面だけは別だから、もっとくつきり浮かび上がらせた

方がいいと思う」と言った。私もなるほどと思い、「『ハムレット』をやった時くらいインパクトがあってもいいかも」と話すと、「考えてみます」との返事だった。



生き延びたネズミの独白

表情豊かな生き残ったネズミの表現を支えていたのはチューターの存在だった。

「また、足の悪い少年役だった高校生は希望した役になれたのに、ことばは早々に入ったし留学経験があつて英語も流暢なのに、なかなか伝わってこない独白でした。そこで改めてCDを聞きながらいねいに物語を読み解きました。時間が取れなかったので私と二人だけでやったのですが、次の活動では一同が見違えるほど変わっていて、私も驚きました。その後どんどん良くなっていき、聞く人の胸に響くことばになりました。発表会后に本人いわく、『すごく楽しかったし、気持ち良かった。テーマ活動にはまりそう』と、『自分の壁をつき破る』経験になったようです。」(前田チューターの「私のテーマ活動づくり十か条」より)



足の悪い少年の独白場面

動画に即して話し合う中で実感したのは、『ハメルンの笛ふき』の矢川澄子氏の日本語のリズムがすばらしいということだった。語りやすい、言いやすいテキストになっている。こういう魅力的なライブラリーがあるからこそ子どもは演りたがり育つのだと思った。オンラインでの「大学生ラボ発表会」(2021年2月23日)での東北支部の『ハメルンの笛ふき』の発表もすばらしく、それを証明していると思う。

●教師・チューターの表現力を鍛える

そもそも教師は表現力を鍛える必要があるというのが私の主張で、「私の劇づくり十か条」の最後に掲げることにした。

私が行き着いた教育モットーは「ことばと心の受け渡し」で、このことが教育現場の隅々にまで行き渡る必要があるということだ。子どもたちの存在を丸ごと受け止めながらこちらの思いを過不足なく語り届けるという作業が教師の仕事であると思っている。しかしながらはたして、私の「ことばと心の受け渡し」がしっかり機能しているだろうか、確認を怠ってはならない。そのためには、意図的に私の場合は演出家や俳優、或いは現場の教師や子どもに学び続ける必要があった。そうした営みを「表現力を鍛える」と考えている。

さて、今回のインタビューは教師をチューターに読み替えて、「チューターの表現力を鍛える」ことのヒントになったと思う。

前田チューターは語っている。

*子どもとの関係性を鍛える

前田:私の場合、チューターと子どもたちの関係性がまったく対等で、それ故に頭を抱えることもあるし、平気な顔して「そうは思わない」と言われたりもする。そういうように育てたんだなと思いながら、お互いにリスペクトしているのでバランスが取れていると思う。子どもたちとテーマ活動をしている現場そのものが、チューターとして成長させてくれているのではないかと思う。

*ことばのやり取りにこだわる

前田:所報2に「からだの語りに時間をかけるが、ことばと心の受け渡しを大事にしたらいいいのではないか」(福田)と書いてあり、私も大事にしたいと考えている。テーマ活動はことばのやり取りに、より醍醐味があると思うが、チューターが意識していないと子どもはからだの語りに流されてしまう。



大聖堂のステンドグラス

*話したくて、演じたくてしょうがない子どもを育てる

前田:小学生が素直に純粋にお話を楽しんでいる。先日、テーマ活動について話したくて仕方がないというようすから大きい子たちが元気をもらったと言っていた。ラボっ子は大きい子にあこがれて育ち、大きくなると小さい子のテーマ活動を、なつかしく、うらやましいと思う。縦長で育つことの意味を新たに感じた。

「チューターの表現力を鍛える」という視点で前田発言を拾ってみたが、そのことはまさにテーマ活動づくり、パーティづくりに直結するものであった。

■インタビューから視えたもの

最後に、インタビューを終えて考えたこと、視えてきたこと、言い残したことなど自由に書いていただいた。

●インタビューを受けて(前田)

ラボもテーマ活動もユニークな活動なので、ややもすると内輪での話になりがちです。

このたびのご依頼では、演劇教育の専門家という外の方とお話しできることが魅力的に思えて、喜んでお受けしました。おかげさまで、私のパーティのテーマ活動と私のテーマ活動観を改めて見つめ直すことができました。貴重なチャンスをいただきましてありがとうございました。

今回改めて考えたことのひとつが、演劇とテーマ活動の表現の違いでした。

テーマ活動は、福田先生の言葉をお借りするなら、「ことばとからだの語り」により意思を伝えあう表現活動です。<ことばがこどもの未来をつくる>というスローガンのもとで行っている教育活動ですから、誤解を恐れずに言うなら、テーマ活動はあくまでもことばありきで、「ことばとからだの語り」によるコミュニケーション能力を培いブラッシュアップすることを一番の目的としていると考えます。

私たちチューターは目の前の子どもたちのために良かれと思うことをやろうとする現場主義ですが、そのためには、思い込みに陥らないように心がけ常に自らを客観視することが大事だと思います。その意識を忘れずに、テーマ活動はまだまだ進化していけると信じて、これからもチューターとしての「表現力を鍛える」学びを続けていこうと考えています。

●インタビューに立ち会って(渡邊)

ラボ・パーティが大事にしているのはコミュニケーションを伴ったことばの教育活動なので、ことばを相手に伝えるということが軸になっていなければ、テーマ活動をして得られるものは半減してしまうのではないかと思います。前田パーティの実践では、相手に伝えるということが意識化されているのだと実感しました。どうやったら伝わるかのやりとりをしていらっしゃるし、時にはさらっときびしく「伝わらない」「何が起きているかわからない」とおっしゃっている。こういう子どもたちとのやりとりは、前田チューターのメモやパーティの記録を見せてもらおうと、はっきりと浮かび上がって見えてくるのではないのでしょうか。子どものノートと併せて見せていただくと、もっと見えてくるものがあるのではないかと思います。

テーマ活動は子どもたちとともに生み出してきた教育活動です。現在も新たに生み出していると言ってもいいと思います。メンバーによっては、同じラボ・ライブラリーのおはなしでも、取り組みのプロセスは異なります。前田チューターの書かれた「十か条」へのコメントや本日のおはなしにふれると、前田チューターなりに「編み出してきた方法」「テーマ活動の取り組みへの考え方」がくっきりと見えてきたように思いました。

テーマ活動を行なうときの大きな枠組みとしての進め方はあります。参加者が同じラボ・ライブラリーを聴いて活動すること、まずはそれぞれが思うがままに動いてみることに、その積み重ねとともにどういう表現にしたいのかまとめていくこと、語られていることばに注目、着目して表現すること……、これらは順番ではなく、その時々に応じて取り組まれることです。子どもたちになってほしい未来の姿を思い描いたうえで、子どもとともにこのプロセスをていねいに積み重ねていってほしいというふうですが、前田チューターとお話してうれしく、楽しく、そして頼もしく思えました。こういう機会に出会えたことを感謝申し上げます。

■ 終わりのことば(福田)

まずは、いろいろの事情でしばらく途絶えていたチューターインタビューが実現できてほっとしている。過去2回と異なるのは、コロナ禍ということで、リモートインタビューになったということだった。渡邊浩之さんという強力な助っ人の存在があり、思ったほどのやりにくさを感じないですんだのは幸이었다。

さらに新鮮だったのは、本文中にも触れているが、前田祥子チューターが私の「劇づくり十か条」に對比して「テーマ活動づくり十か条」を用意してくださったことだ。私としては下掲の質問事項を提示し、回答を求めるのを常としていたのだが。

- ・テーマ(演目)決めのポイント(話し合いの時間、注意していることなど)
- ・役決め(立候補、オーディションなどの方法)
- ・劇づくりの実際(集団討議、集団指導体制、チューターの役割)
- ・劇づくりの方法(台詞、ナレーション…)
- ・集団身体表現の作り方
- ・個を大切に作るテーマ活動など

前田チューターの「テーマ活動づくり十か条」はこの質問6項目をカバーしてあまりあるものだった。まさに27年にわたるチューター歴の中で紡ぎ出された実践と研究がびっしり詰まったものだった。当然の帰結としてインタビューは「テーマ活動づくり十か条」をじっくり解きほぐすものになっていった。

「十か条」を探ったことによって、今回新たな展開として、指導者の「表現力を鍛える」とはどういうことなのかということが話題になった。期せずして指導者観を問うことになった。

最後に、貴重な時間を割いてお付き合いいただいた前田チューターにお礼を申しあげたい。いつか生で前田パーティのテーマ活動を拝見できることを願っている。渡邊さんには様々な折衝・手配、リモートのセッティング、原稿起こしなどきめ細かく対応していただいた。感謝のみである。

テーマ活動づくりの方法論を求めて(番外編) 中国支部オンライン研修「テーマ活動について語り合おう」

福田三津夫
(白梅学園大学, 演劇教育)

2020年10月19日、「ラボ中国支部秋のオンライン一日広場」が開催された。講師はラボ教育センターの木原竜平氏。「福田三津夫氏論文を題材にテーマ活動について語り合おう」という、私にとっては少々面映ゆいテーマの講座・研究会であった。

木原氏によると、「所報」掲載の福田論文を受講者が読んでオンラインで参加、木原氏が福田論文を解題、実際のラボの事例やほかの専門家の論文などつなげて話をし、その後質疑応答するというスタイルで実施したという。受講者24人が4つのブロックに分かれて「私のテーマ活動づくり5か条」を元にグループ討議があったという。それは木原氏の以下の投げかけに応えたものだった。

「子どもが『生き生きとしたテーマ活動』をするために、子どもがテーマ活動を通して成長するために、何をたいせつにしたいですか？ あなたの『テーマ活動づくり5か条』を教えてください」

本稿では貴重な講座の概要だけでも知っていただきたいと思う。そして、一部ではあるが受講者のアンケートも紹介したい。講座の充実ぶりはアンケートに如実に反映されていたからだ。

●講座の実際

当日の講座の内容については、木原氏の軽妙で誠実な語り口が実感できないのは残念ではあるが、使用された全21頁にわたるパワーポイントのうち、17ページを共有するので確認していただきたい。

パワーポイントを見ていただく前に、講座の設定理由や内容構成について木原氏にコメントをいただいたのでお読みいただきたい。

木原: 中国支部では、近年は毎年1回、「ラボ言語教育総合研究所報」から論文をひとつ取り上げ、それを素材にチューターが読み込んだうえで相互研修をしています。2020年は福田三津夫氏の論文を取り上げることを支部で決め、「所報」の編集担当だった木原に「解題を」との依頼がありました。

福田氏の論の要点を実際のパーティでの場面をイメージして、「みなさんのパーティでも実行されていることがありますよね。なかにはあまり意識しないで行なっていることもあるかもしれませんが、それにはこのような効用があるのではないのでしょうか」「それらをあらためてチューターが意識化し、必要な時にそこに立ち返ることで、子どものライブラリーの聴きこみがすすんだり、子どもの対話が促進されたりということがあるのでは？」というスタンスで、紹介しました。

福田氏の論文をラボ言語教育総合研究所の他の研究員の論文などや、ラボを知る他の専門家の文章ともつなげて話をしました。そして各自事前に用意してきた「私のテーマ活動づくり5か条」をもとに相互研修をしました。

* [2020 中国支部一日広場「福田三津夫氏論文を題材にテーマ活動について語りあおう」\(スライド\)](#)

●講座の感想アンケート

すべての感想アンケートに目を通したが、講座内容に深くコミットしたものが目白押しだった。受講者の日常的な実践の深さと豊かさが垣間見られるようだ。参加していないチューターにとってもパーティづくりやテーマ活動づくりのヒントになるのではないかと思い、そのいくつかを紹介させていただくことにする。

【福田三津夫氏の論文の解題(by 木原)について】

●八田順子チューター(岡山)

お忙しい中、貴重なお時間をありがとうございました。

分かりやすいことばを使って説明して下さるので、内容やことばを理解しやすかったです。

テーマ活動の方法論のお話から、テーマ活動だからこその強み、

- ・疑似体験から、五感を使って得た実体験に引寄せ、想像力を増幅させる
- ・体験する事によって、言葉が身体に染み込む
- ・聴く、つなぐ、もどすを繰り返す事で対話力が身に付く
- ・子どもたち自身の知的好奇心に訴えるから、自ら学ぶ姿勢が身に付く
- ・いくつかのペルソナを持つ必要があり、それを劇を通して表現する事で、心を解放し、様々な感情を理解する事ができる
- ・さまざまな役割を体験する事で親和性が育つことを学ぶ事ができました。

そしてさらに、生きていく上での知識や技術、言葉を楽しみながら、しかも自主的に学び深められるラボは、これからの厳しい世界を歩む子ども達の力に必ずなると、改めて確信しました。

●西村恵チューター(山口),

レポートをより丁寧に詳細にお話して下さった感がありました。自分たちが試行錯誤しながらやってきていた方法論で良かったのだと思える部分と、無意識でしていた部分にも福田氏&木原氏の解説が加わったことで、実は Hidden Manual の様にあたりまえのこととしてやっていたことの意義や意味が再認識できる機会となりました。本物にふれることや五感を使う取り組みのたいせつさはわかりつつも、その機会が減っているのではないかと負い目を感じている部分もありましたが、「パーティの仲間の音声を聞く、仲間の音声でも聞くことが五感を使って学ぶことになる」との話には、パーティ活動自体を粛々と続けることへの励ましにも思えました。

平田オリザ氏の演劇教育のたいせつさを語る切り口の数々に惹かれました。ペルソナをもつことの必要性とこころの解放に繋がる話や演劇とキャンプの親和性のお話等は、まさにラボ活動を語る際に自身でも使ってみてみたいお話でしたので、平田氏の本を読んでみたいなと思いました。

【テーマ活動づくりを巡って】

●宮田智里チューター(広島東)

My Party のテーマ活動のたいせつにしたいところ

- ・好きなライブラリーに出会い、お話を伝えることができる
 - ・日常の中でたくさんの体験・経験・知識を得ること
 - ・自分の体験・経験・知識から思いをそうぞう・動きをそうぞうすることができること
 - ・自分の思いを伝え、相手の意見を受け止めながら作り上げていく過程
 - ・自分の意志、仲間の支え合いの中で作り上げること
- (楽しみながら、自分で乗り越えるべき壁を見つけていくこと)

自分のラボの理想像であり、それを実践されているチューターの事例に共感する事ばかりでした。また作り上げる過程を共有することで、違って当たり前の中で、ヒントをもらいながら自分自身でまた考えて行動することが許されていることのすばらしさを感じました。どのチューターも自分自身を高め続けていること、子どもたちに本気で向き合っていることを改めて感じることができました。それぞれを否定しない中でも共通の思いで、ライブラリーでつながっているすばらしさを改めて感じました。憧れの先輩チューターのようなパーティ活動ができるように日々、理想を追い求めながら、試行錯誤して実践を積み重ねていきたいです。

●桐林ミチコチューター(広島西)

1. 取り組みたいお話を皆で出し合い、話し合いの末に3~4話に絞り、各話を好きな役で、1回テーマ活動で動き、お互いにお話を共有したうえで、感想を出し合い、内容や、グループに合った、テーマを一つに決定する。最初の一か月で。
2. 配役決めは、決定したテーマの役を自由に2回ほど動いて、内容をかなり理解したところで、各自の希望を優先するが、多数の場合は話合いで決定。希望者のない役は、みんなで推薦、承諾によって決定。役によっては、ひとり、複数の場合もある。
3. 家でも各自、CDをよく聴いて、疑問など研究したうえで、お話の内容、作者のこと、その時代背景や地理などに関して、20問程度の質問形式で「物語検定」をリーダーとチューターと話し合っ出す。各自への聴き込みの充実と励ましのために。

4. 最初に、物語でどこが、一番面白い、興味深い、楽しい、など話し合っ、そのところから、細かい表現活動をする。例として、「十五少年漂流記」や「ヘルガの持参金」「オバケのQ太郎」などは、グループで歌に振りつけを考えて発表し合っ、良いところを合併して仕上げる。

各自、意見が活発に出て、盛り上がるし、相手の良いところを楽しく発見し、認めていき、仲間との充実感が湧く。

5. 各自で、またみんなで、役つくりや場面作りで、積極的に意見を出し合っ、納得がいく形で、自分たち独自の発表になるように、喜びと、誇りと、成長をもたらしたい。もちろん、遅くとも、日本語は1ヶ月前に、英語は2週間前に、各自、家で何回も、何回も良く聴いて、感情を込めて、観る人に伝わる発表をめざす。

最後に木原氏より講座を終えての感想をいただいた。

木原:オンラインでの研修でしたが、中国支部の事前の準備がしっかりされていて、みなさんが福田氏の論文を読み込んでから参加されているので、それを前提に話すことができました。各テューターが自分のパーティに引き寄せてイメージし、その場でグループごとに意見交換するスタイルも良かったと思います。まさに事例も、知恵の蓄積も現場にこそある。子どもの事実、子どもとテューターの営みの事実から学ぶことの大切さを再確認できました。

今回の中国支部オンライン研修「テーマ活動について語り合おう」はまさに「テーマ活動づくりの方法論を求めて」の一環であると思ひ、この論考の「特別編」ということで紹介させていただいた。

私が学校教師だったときに、意図的に「学級づくり」「授業づくり」「劇づくり」という視点から自身の教育活動について総括し、それを演劇教育の仲間たちと集団的に論議することを日常的に実践していた。そのことが明日の教育実践の糧になったことは疑いない。ラボでも中国支部の研修を参考にしながら、テーマ活動の動画検討や「テーマ活動づくり〇か条」「パーティづくり〇か条」などの交流を通して実践を深めていただきたいと切に願う。